

「実盛」を歩く

廣田 幸稔

日本で一番長いJR京都駅0番ホームから特急サンダーバードに乗り、琵琶湖を右手に北上しながら二時間弱で加賀温泉駅に到着しました。今年、東京金沢間は北陸新幹線が開通しましたが、関西からは在来特急が旅の主役です。今回目指すのは、実盛の首をあらためたという「首洗池」（石川県加賀市）、木曾義仲が実盛の亡骸を葬ったという「実盛塚」、さらに小松市まで足を延ばし、実盛の鎧兜が納められている「多太神社」（石川県小松市）の三か所です。

JR加賀温泉駅から車で十五分ほどで最初の目的地、柴山潟の源平橋すぐそばの「首洗池」に着きました。途中の信号機には「源平町」の標識、源平橋のもとには源平食堂など、地名に古戦場であったことを感じます。「首洗池」は周囲100mに足らない小さな池です。池のほとりには、実盛の首を抱いて天を仰ぐ木曾義仲、兜を前に涙をぬぐう手塚光盛、樋口次郎の三武将の像がありました。池の裏手には小高い丘があり、その向こうには水田、さらにその先に日本海が広がります。眼下に広がるこの平野一帯が古戦場だったのかもしれない。木曾義仲は敵将である実盛の亡骸を日本海にほど近い場所に葬ったとされます。その場所が源平橋川沿いに自転車で十分ほどの住宅地の中にある「実盛塚」です。小松空港を発着する飛行機が何機も実盛塚の真上を通過して行きますが、松林に囲まれた塚の周りはきれいに掃き清められ、静かな空間です。周辺に住む方たちが塚を丁寧に守っていらつしやるのがわかります。最後の訪問先はJR小松駅近くの多太神社です。木曾義仲はこの神社に実盛の鎧兜を納めました。神社の宝物殿では、実盛の兜保存会の方から展示された数々の宝物の説明をとて詳しく伺いました。実盛の兜は直射日光を避けて厳重に納められています。兜は厚く頑丈に、すね当ては薄く軽く、というのがガラス越しにもわかり、当時の技術の高さに驚きます。戦時中、この兜が軍部に押収されるのを恐れ、宮司さんは土中密かに隠して難を逃れたそうです。宝物殿には能「実盛」にもワキとして登場する第一四代遊行上人が納めたとされる回向札や、今も行われている御遠忌の様子、芭蕉の真筆など貴重な資料が数多く残され、一見の価値があります。実盛の兜を神社に奉納する際に書かれた寄進状は、木曾義仲の愛妾・山吹の手によるものですが、この山吹自身、実盛の娘という説もあるそうです。また、余談ながら、能「安宅」に登場する富樫と実盛は親戚でもあります。

実盛は莊園を管理する別当職であったために、莊園の所有者が代わることで源氏から平家に任せましたが、それもそこに住む領民のためだったといえます。源氏の家督争いに巻き込まれそうになった幼い義仲の命を助け、平家の家人となった後でも最期は義仲に打たれる覚悟で一騎踏みとどまった実盛。その実盛の霊を弔った縁から、今でも時宗総本山からの遊行上人は必ず実盛塚と多太神社に立ち寄り、回向されるそうです。篠原の合戦から数百年を経た現在にまで語り継がれ大事に守られてきた史跡、資料、行事の陰には、代々の宮司、氏子、そこに住む人々の思いがあつてのことだと実感しました。毎年七月下旬には実盛の兜祭りが行われます。

平成二十七年長月吉日

廣田 幸稔



←源平橋。写真の山柴山山前右側から白濁が臨めるは日本海にそぐ河口



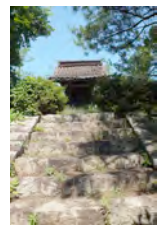
↑国道沿いにたつ「篠原古戦場跡」の碑。「首洗池」と池を見下ろす丘にある祠。  
←「首洗池」のほとりに建つ義仲の像



↓芭蕉が多太神社を訪れた際に詠んだ「あなむしたのきりぎりす」とんのかぶりの句碑



→京都駅0番線ホーム。福井・金沢・富山方面の北陸線が発着する加賀温泉駅。北陸の名湯の玄関口。駅には旅館組合の美しい女将さんのポスター「レディーカガ」が出迎えてくれる



→「実盛塚」は松林に囲まれた住宅地の中にある。小さなお花とお水があがっていた  
↓小松市の多太神社。小松駅から徒歩10分

